

共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第3回研究会（通算第3回目）報告書

2024年11月2日（土）日本時間17時より、共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第3回研究会（通算第3回目）を開催した。研究会は、AA研セミナー室（301）とオンライン（Zoom）でのハイブリット形式で、使用言語は英語で開催した。

参加者は、共同研究者では、松永泰行（東京外国語大学）、飯塚正人、後藤絵美（以上、AA研）、Mostafa KHALILI（京都大学）、酒井啓子（千葉大学）、吉岡明子（日本エネルギー経済研究所）、貫井万里（文教学院大学）、Vakkas COLAK（東京外国語大学）、Sohrab AHMADIAN（東京外国語大学）、Mehmet Mashuq KURT（ロンドン大学）、オブザーバーとして、Rawia Altaweel（千葉大学）、Shima WAKED（東京外国語大学大学院）、Mariam HESHAM（東京外国語大学大学院）、が参加した。

報告者と報告タイトルは以下の通り。

Mehmet Mashuq KURT（ロンドン大学）、"Radical Habitus and Political Violence in the Middle East: A Case Study of Youth Radicalisation across Turkish-Syrian Border Zones"

報告では、Kurt氏が、2015年から2018年までトルコ国内およびギリシアで行った参与観察および聞き取り調査を含むフィールド調査に基づき、2023年12月に *Current Anthropology* 誌に発表した、“Radical habitus: Trajectories of youth radicalization in Turkey”という論考を下敷きにし、2014年10月のシリア・トルコ国境地域のコバーニ（アイヌ・アルラブ）の包囲時のビンゴールでの体験から始め、“youth radicalization”の実例をよりよく説明するために、“radical habitus”という概念を導入した背景および趣旨について説明があった。続いて、radicalizationの前段階として、“moral crisis”の経験やそれぞれの主体に即した trajectoriesの中で radicalizationを捉える意義などについての説明があった。

続いて、“radical habitus”の影響、“radicalization”概念の定義や理解などを巡って、活発な全体討議を行い、解散した。

（報告：松永泰行）